月刊
名大文学部
第124号
隔月刊行

中国語学へのいざない

中国語中国文学

私は「言葉」が好きで、中国・中国語が好きで、将来は教育に携わりたくて…と好きな事（だけ）を学ぶ中で中国語学に出会い、研究の道を志すようになりました。現在は現代中国語文法を専門とし、中国語を教えていますが、母語である日本語との対照は常に意識的・無意識的に付いて回りますし、教育現場で見つけた小さな問題を研究テーマに発展させ、その成果を何らかの形で現場に還元したいと考えています。したがって、日中対照研究や中国語教育にも関心を寄せています。

言語の表現形式は、その言語を使用する民族集団の事象・現象・心象に対する認識を反映していると言われます。例えば、「ぼく？もちろん泳げるよ。2000 メートルは余裕で泳げるかな。でも、今日は風邪引いちゃって泳げないんだ。」を中国語で言う場合、“我？当然会游泳啊。轻轻松松就能游 2000 米。但是今天感冒了，游不了。”のように、「泳げる・泳げない」を複数の形式（助動詞や補語形式）を用いて表現し分けます。私たち日本語話者が一律に「デキル・デキナイ」と見ている〈可能の世界〉を、中国語話者は何らかの原理に則って区分しているのです。もしかしたら中国語話者の〈可能の世界〉は日本語話者のそれとはまったく違う形に切り取られているのかもしれません。そして、皆さんはその「何らかの原理」を「文法」として学ぶのですが、それは決して絶対的信頼の置けるものではなく、現時点で・説明しやすい・便宜上のルールという程度のもので、ルールに当てはまらない言語事例は山ほどあります。この「例外」とされる事例の中にこそ、中国語の本質が隠れていたりするものです。

言語研究の醍醐味とは、これまで疑うことのなかった常識（≒偏見）が覆り、思いがけない認識に至る驚きと喜びを得ることだと思います。皆さんも中国語学を通じてこの驚きと喜びを味わってみませんか？

勝川裕子　准教授

研究室書架。子供向け絵本の中にも多くの発見があります。

業平は東へ下ったか

日本文学

私は平安時代の物語文学を中心に研究してきました。『竹取物語』『伊勢物語』『源氏物語』など、いずれも古文の授業でおなじみの作品ですね。『伊勢物語』でもとりわけ有名な九段は、東下りの物語。都の生活を辛く思う主人公の男（在原業平をモデルとする）が友人と連れだって東国へとさすらいの旅に出る。尾張国八橋（現在の知立市のあたり）では、沢に美しく咲く「かきつばた」を巧みに詠み込んだ歌を詠む。さらに富士山の偉容に驚き、隅田川では「都鳥」に望郷の涙を流す、という比較的長い章段です。九段以降も旅は続き、陸奥（東北地方）にまで及ぶことになります。ところで業平は実際に東に下ったのでしょうか？ 肯定説と否定説、古くから議論がありますが、中世の面白い説を紹介しましょう。高貴な姫君との恋愛事件によって、業平が「（京都）東山」に蟄居、謹慎していたことを比喩的に「東」に下った、と表現しているのだ、というのです。また「八橋」は業平の八人の恋人たちの比喩だともいいます。こじつけといえばそれまでですが、自由で柔軟な発想ともいえますね。ちなみに中世の『伊勢物語』理解は謡曲などにも大きな影響を与えています。やがて近世になると合理的・実証的な学問が見られるようになります。国学の祖、契沖は業平の官位昇進の停滞期に都を離れたという説を、資料に基づいて論じました。現在でも決着を見ていませんが、東下り否定説のほうが優勢のようです。神話や物語に見られる貴種流離譚（高貴な主人公が生まれ故郷を離れ、さすらいの旅を続ける ―『古事記』のヤマトタケル、『源氏物語』須磨巻の光源氏など）の類型を踏まえたフィクションと考えるのです。著名な古典には多くの先人による研究、注釈の歴史があり、作品の理解は時代によって変化もします。そうした研究の積み重ねに感謝しつつ、少しでも新しい作品解釈を示せるよう努めています。

大井田晴彦　准教授

グリム童話のメッセージ～ヘンゼルとグレーテルの解釈から考える～

ドイツ語ドイツ文学

皆さん、Guten Tag!（こんにちは）名古屋大学文学部ドイツ語ドイツ文学研究室４年の橋本佐和子です。卒業論文ではグリム童話について研究しています。

皆さんは「ヘンゼルとグレーテル」をご存知でしょうか。お菓子の家と魔女が出てくるあの物語です。あのお話って、結局はどういうことを言いたいのか考えたことはありますか？「いい子でいればピンチになっても神様が助けてくれる」？「子どもを捨てる悪い母親には天罰が下る」？グレーテルの機転で兄妹は助かるのですから、「危機から抜け出したければ賢くなりなさい」かもしれませんね。グリム童話は民間伝承が主であるため、多くの研究者が実に様々な解釈を述べています。私が特に感銘を受けた解釈は野村泫という研究者の「人生の問題を退行と拒否で切り抜けようとしても、それはなんの役にも立たないし、問題の解決をますます難しくするだけだということを示している」という解釈です。兄妹は最初、小石を道標に家に帰りますが、野村先生は、これは兄妹が不都合な現実を拒否していることの象徴だといいます。結果、また貧しくなって二人は森の更に深いところに捨てられてしまいますよね。野村先生は、童話の解釈において「子どもを追い出すようなひどい母親は、子どもにとっては成長を促す酵素のようなもので、変化を推し進める力の象徴である」と述べています。そう考えると、子供を広い世の中へと送り出す母親に対し、その子供を待ち受ける魔女は、無知で無垢な人に甘い言葉をかけて騙し利用する悪人の象徴かもしれません。この物語は、今までの世界から外の世界に放り出された兄妹が、魔女との対峙を経て困難を乗り越える力を身につける「サクセスストーリー」とも言えるでしょう。

一見子供っぽい「グリム童話」も、様々な解釈を見れば、現実に通じる示唆を発しているとは思いませんか？

参考文献：『グリム童話 ― 子どもに聞かせてよいか？』野村泫著　ちくま文芸文庫　1993 年

橋本佐和子　学士課程４年

金田鬼一が訳したグリム童話集。独特の言い回しが特徴。

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。